

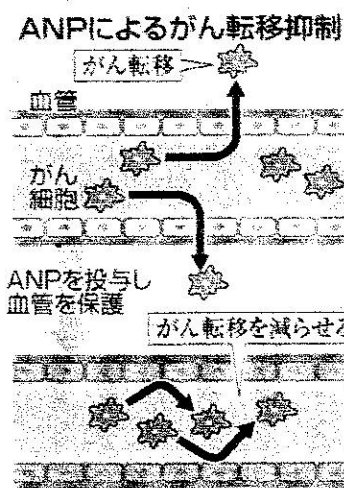
ホルモン がん転移抑制

心臓から分泌 血管保護

国立循環器病
研究センター 寒川所長(板野町出身)ら解明

心臓から分泌され血管を保護するホルモンが、がんの転移や再発を抑えることを国立循環器病研究センター(大阪府)などのチームが解明し、23日発表した。がん細胞は血管を通じるなどして転移するが、これを抑える薬はなかった。一般的にがんが心臓に転移しないのはこのホルモンの働きと考えられ、同センター研究所の寒川賢治所長(板野町出身)は「あらゆる種類のがんの転移や再発を予防できるとみられ、世界初の治療法になると期待される」としている。

ホルモンは心房性ナトリウム利尿ペプチド(ANP)で、心不全の治療薬として使われている。がんの転移は、血中に漏れ出たがん細胞が、炎症などで傷ついた血管の壁にくっつき、約20%が再発するが、投与すると約4%に下がった。マウスにヒトの肺がんの



新治療に期待

細胞を移植するとANPを投与したものは肺へ転移する細胞の数が約80%減少。乳がんや大腸がんの細胞では、肺への転移が約70%抑えられ、悪性黒色腫では約85%減るなど、がんの種類に関係なく抑制された。ANPが血管で働かないマウスでは、悪性黒色腫の肺転移が通常の約3倍に増え、心臓にも転移した。成果は、25日から横浜市で開かれる日本癌治療学会で報告する。



ANPを投与していないマウスの肺(上段)は悪性黒色腫が転移して黒くなっているのに対し、ANPを投与したマウスの肺(下段)は転移がほとんど見られない(国立循環器病研究センター提供)